

概 要 報 告

実施期日	8月2日(金)
部 会 名	小学校 特別の教科 道徳部会

神奈川県研究主題

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」

テーマ

『自他の良さに気づき、考え、行動できる子～自己肯定感を高める工夫を通して～』

提案概要

本単元の主たる教材は「ぐみの木と小鳥」（B主として人との関わりに関すること）である。教材を選定するにあたり、学校教育目標である「自立・貢献」、めざす子ども像「自分を好きになり、自分を高める子」を柱として課題意識を探っていった。児童の実態としては自己肯定感が低いこと、主体的に授業に関われない子が複数いることが挙げられ、「価値を実現することの難しさを考えたり、自分とは違う価値に触れたりする時間を大切にしたい」という願いから本単元が設定された。この願いを実現するために、自分自身について振り返る時間を充実させることを意識し、教材の登場人物に寄り添って考えること、学校行事に合わせてカリキュラム再編することを通して自分ごととして学習できるようにした。

道徳的価値についての理解を深めるために以下の手立てをおこなった。

①教材の内容理解を深め、物語に入り込むために挿絵・BGMを活用する。②AかBかの二択ではなく、その間にある心情について目を向けるため、小鳥の心情を円グラフで表現する。③小鳥の気持ちを想像するために役割演技を取り入れる。④生活経験からつながることを意識するために、身近な話題や以前の道徳の授業から本時のめあてをつくる。⑤身の回りにある「親切」を実感させるため、これまでの日常生活の中にあつた「親切」場面をスライドショーにまとめて提示する。これらの手立てをおこなうことで自分ごとの学びにし、自分の経験を振り返ることを通して、身近にいる人に温かい心で接し、自分にできることを精一杯しようとする気持ちを育てるための実践となった。

【成果】

上記の手立てによって児童が生き生きと学習に取り組む様子が見られた。普段から集中が切れやすい児童も挿絵やBGMがあることで一度の範読で内容の大体を理解していた。また、心情を円グラフで表したことで自分の思いを表現しやすく、友達円グラフと見比べて自然と対話が生まれていた。そんな中で行った役割演技が学習を自分ごとにさせていた。学んだことが普段の自分たちの生活の中にあると気づき、温かい気持ちで学習を閉じることができたのはやはりスライドショー（2年ぽかぽか日記）のためである。

「親切」という抽象的な概念が、自分たちの日常生活や写真などを通して、具体的なイメージとなったことで、理解を深めることができた。本単元を通して多くの児童に変容が見られ、振り返りの中でも教材についての感想ではなく、自分自身について考え、日常生活に生かしたいと書いている児童がたくさんいた。

【課題】

大きく分けて2つの課題が見つかった。一つ目は「児童の意見の取り上げ方」である。意識しているつもりでも否定的な意見・ネガティブな意見は取り上げにくい。授業の流れを考え、取り上げなかった意見、つぶやきの中にこそ、児童の本音があるのかもしれない。その本音を引き出すことによって、自分とは違う意見に気づき、多面的・多角的な学習につながるのではないかと思う。

二つ目は「申し訳ない」というキーワードに含まれる複数の意味を全体で共有できなかったことだ。「申し訳ない」には「ありがとう」「ごめんね」という二面性がある。児童がどちらのイメージでこの言葉を捉えているかによって、考えの方向性が変わってくる。このズレを抱えたまま話し合いを進めてしまったことで、「親切」についての考えを広げることができなかった。また、2年生の実態として「申し訳ない」の中に「ありがとう」の意味を見出すのはとても難しかった。

発達段階に応じた「めざす児童の姿」を的確に捉え、授業を組み立ててキーワードの設定をしたり、発問を考えたりしていくことが重要だと改めて感じた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱

「主体的・対話的で深い学びをするための活発な議論を促す工夫・手立て」について

協議概要

今回の単元では使った円グラフは2年生にとって使いやすく、自然な対話が生まれていたのが良かった。気持ちを「見える化」することでどの児童も進んで学習に参加し、自分の意見を表明することができること、それを通して他者の意見と比較できることで思考を深めることができる。最近では道徳の教科書の最後にいくつかの思考ツールが紹介されていたり、「ロイロノート」の中にも多数用意されたりしている。児童の実態にあった思考ツールを開発、活用していくことは効果的である。

役割演技については難しさを感じる。演技の場面の選び方、演技を行う児童の指名の仕方によっては本時のねらいと合わなくなることがある。45分という短い時間の中で児童が教材内容を理解し、自分の意見をもち、表現し、対話することを通して考えを深めていく。その時間をどう確保するかも課題となる。

本時の「めあて」「発問」の作り方が大切だと改めて感じた。そこに必要感があること、日常生活の中から生まれていることで自分ごとになっていく。教科書通りの順に学習を進めていくのではなく、年間の見通しをもって再構築すること、柔軟に続けていくことが重要である。児童の実態はどうか、教師の願い・ねらいとズレがないか、児童の本音をどう引き出すか、自分の授業を見つめなおすとともに、学年・学校全体として道徳教育に取り組むことでよりよい学びとなる。

まとめ概要

提案者（授業者）は本単元で効果的な5つの手立てをおこなっている。手立てが効果的になるかどうかは、各学校・学年・クラス・個人の良さや課題を的確につかむこと、その実態に合わせておこなうことが鍵となる。道徳的価値を理解し、判断し、実践していく態度を育むのはもちろん大切だが、自分の価値に気付くことも忘れてはならない。課題ばかりに目を向けるのではなく、「親切にしている自分」「親切にしてもらっている自分」に気づくことができるとうい。

そのために自分の考えを「見える化」し、共有していくのは大切である。しかし、それが目的とならないように気を付けたい。あくまで「主体的・対話的で深い学びをするための活発な議論を促す工夫・手立て」であり、手段である。以上のことを意識して手立てを考えていきたい。

道徳の学習にあっては道徳教育の「要」を意識して打つことが重要である。単一の授業だけでは効果は低く、年間を通して意識的に授業を作ること、学年、学校として協力的に授業を作ることが日常化していくことが求められる。